

2016 年度学院留学 研究成果概要

種別：学院留学（長期）

所属・職・氏名：神学部・助教・東よしみ

研究課題：ヨハネによる福音書における終末論とヤコブによる手紙の研究

留学期間：2016 年 4 月 1 日-2017 年 3 月 31 日

研究成果概要

まず、ヨハネによる福音書における終末論に関しては、2015 年にエモリー大学に提出した博士論文 *Reading John 11:1-12:11 through the Lens of the Resurrection in 1 Enoch* の書き直し作業を進めた。書き直した原稿をドイツ、*Francke* 社に送り、*Neutestamentliche Entwürfe zur Theologie (NET)* の業書から出版されることが決まった。編集者とさらなる書き直しの方針について相談し、現在、書き直し、編集の作業を進めている。これは、2017 年中に出版される予定である。また、博士論文の中の一つの章をさらに発展させて新しく展開させた研究成果を、2016 年 9 月の日本新約学会において「ラザロの復活物語を読む」と題して発表を行った。この発表では文学的な手法を用いてラザロの復活物語を読み、「しるし」がもつ物質的な側面が読者の読み行為に与える効果について議論した。ラザロの起こしというしるしがもつ物質的、身体的、感覚的な側面は、読者の五感を刺激し、読者が死から生への移行としての復活を物語世界の中で経験することを可能にする。終末時の復活は、ラザロの復活において先取りの既に起こっており、この物語を読む読者は、終末時の復活を生き生きと具体的にイメージしながら物語世界の中で先取りの味わうことができるということを議論した。この発表は、2017 年 7 月に『新約研究』において論文として投稿する予定である。

また、2016 年 10 月のエモリー大学の *New Testament Colloquy* において、*Vernon Robbins* 教授の論文“*Kinetic Divine Concepts, the Baptist, and the Enfleshed Logos in the Prologue and Precreation Storyline of the Fourth Gospel,*”に対する応答の発表をした。この発表では、認知科学の知見をヨハネ福音書に援用し洗礼者ヨハネの役割を議論する *Robbins* 教授の論文の先行研究への貢献を指摘した。その上で、洗礼者ヨハネの位置づけ、聖書テキストの翻訳、テキストの歴史的社会的背景と読者への効果に関して、いくつかの質問をなげかけた。この研究

会における議論は、自らのヨハネ研究を深めるためにとくに意義深いものであった。さらに11月の *New Testament Colloquy* でも、デンマークの Aarhus University の Kasper Bro Larsen 教授による発表“*Jesus the Homo Novus: Rhetorical Character Presentation in John 1-2,*”がなされ、ここでの議論も自分のヨハネ研究の枠を広げるものであった。また、11月には、*Society of Biblical Literature* の学会に参加し、ヨハネ研究のいくつかの発表を聞き、最新の研究動向を知ることができた。現在、これらの最新の研究成果を取り入れつつ、7月に『新約研究』で発表する論文を執筆中である。

また、ヤコブによる手紙の研究に関しては、まず、この手紙の研究への予備的作業として位置づけている Richard Hays, *Echoes of Scriptures in the Letters of Paul* の翻訳を進め、残り一章を残すまでになった。また、ヤコブ書の先行研究を、エモリー大学の図書館を利用して収集し、重要な先行研究にはほぼ目を通すことができた。また、11月の *SBL* の学会でも、ヤコブ書の発表を聞くことができ、最新の研究動向を知ることができた。ヤコブ書に関する研究成果は、2017年2月に“*James as a Diaspora Letter: Preliminary Work for a Commentary,*”という題の論文を執筆して発表した。発表に先立って、エモリー大学を退職し、ヤコブ書研究の権威である Luke Timothy Johnson 教授と、執筆した論文について、また今後の研究方針について話し合うことができた。また、研究会での発表では、特に Eve Marie Becker から有意義な応答を得ることができ、注解書執筆にむけて、具体的で有益な助言を受けることができた。今後、実際に一章から注解書の実際に執筆にとりかかる予定であり、これは、5年後くらいをめどに日本基督教団出版局の注解書シリーズから出版される予定である。

最後に、留学中に寄稿した論考であり、留学の研究課題と広く関係するものについて記しておく。物語批評を用いてルカ福音書のテキストを読み解く論考「飼い葉桶の中の子—物語批評による解釈」を『福音と世界』12月号に寄稿した。